慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	行動諸科学におけるエコロジカルパースペクティヴについての一考察
Sub Title	On the meaning of socio-ecological perspectives in the behavioral sciences
Author	井下, 理(Inoshita, Osamu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1977
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.17 (1977.) ,p.75- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文 表紙のタイトル：行動諸科学におけるエコロジカルパースペクティブについての一考察
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000017-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

行動諸科学における
エコロジカルパースペクティヴについての一考察

On the Meaning of Socio-ecological Perspectives in the Behavioral Sciences

井　下　理
Osamu Inoshita

目　次

1. はじめに
2. ソシオエコロジカル・パースペクティヴへの関心
　2. 1 エコロジー
　2. 2 エコロジカル・パースペクティヴへの関心
　2. 3 「風景」の科学へ向けて
3. 行動諸科学におけるエコロジカル・アプローチの現状
　3. 1 心理学
　3. 2 マーケティング
　3. 3 社会学
4. まとめ

1. はじめに

本稿のねらいは，最近注目を集めている，いわゆる〝エコロジカル・アプローチ〟が，いかなる背景をもっているのか，なぜ注目されるようになったのか，について考察を加えると同時に，エコロジカル・アプローチが，現在の行動諸科学の中で，どのように展開されているのか，について明らかにすることにある。

エコロジカル・パースペクティヴの輪郭を明らかにすることは，今日，人類の直面している根本的な問題の構造を明らかにすることに関連している。根本的な問題とは，人間が，個として存在していると同時に，類として存在するということからもたらされる問題のことであり，今や，それが人間にとって，一つのディレンマとして経験されるところにきていると考えられる。人間は，所与の自然環境の中で，自分のもてる能力を発揮して，技術を工夫・改良しながら，科学を発達させ，生存に必要な資源を獲得すると共に，自然環境をみずからの生存に都合のよいように，手を加えつつ生活を営んできた。その中で築いてきた〝文化〟においては，人間ひとりひとりは，個として認められ，尊重されなければならないという思想，すなわち個としての基本的な尊厳としての〝人権〟が，認識され，意識され，志向されてきたのである。

人間が，類として，その生存・成長が，無限に可能ではなく，むしろ，地球環境という限られた条件の下では，資源の枯渇，人口増加といった問題が，類としての人間の存続に大きな危機として立ちはだかっていることが，'70年代に入って急速に明らかになってきたのである。そして，人間が類として存続していくためには，人口抑制の問題をはじめ，さまざまな問題に対して〝類としての人間〟という観点から対処しなければならないことが明らかになってきた。

しかしながら人間は，類としての存在であると共に，個として存在している。個としての人間の存在と，類としての人間の生存とは，まったく同じように尊重されねばならず，そのいずれか一方が，もう一方に対し，従属したり，手段化されうるものではない。中鉢正美は，「個体としての人間と種としての人類との対立関係は，実は人間という存在そのものにそなわる本質的問題であったといわなければならない」と述べ，「人類はその種としての存続と個人の人権との間に，なんらかの理性的な制

御方法を創出せざるをえなくなってきたのである」と語っている。[1]

エコロジカル・パースペクティヴを論ずるとき，そこには上述の問題が意識されているのである。エコロジカル・パースペクティヴに基く理論的枠組というものは，未だどの分野においても完成したものは存在していない。しかしながら，そのことは，エコロジカル・アプローチの現代的意義を少しも減ずるものではない。むしろ理論的枠組構築の不備性は，そうした研究が，必要とされているにもかかわらず実際には追究されていないことを表わしているのであり，今後の探究が求められているのが実状である。本稿は，そのためのもっとも初歩的なステップとして，エコロジカル・アプローチを形成するパースペクティヴに焦点をあわせ，エコロジカル・パースペクティヴへの関心の高まりを，その社会的背景並びに認識論のレベルで取り上げ，そのあと，エコロジカル・アプローチの現状を概観することにより，今後の研究の礎となることを，そのねらいとしているのである。

2. エコロジカル・パースペクティヴへの関心

2. 1 エコロジー

エコロジー[2]は，今から100年以上も前のこと，1866年に，ドイツの生物学者ヘッケル (E. Haeckel) によって，生物学の新しい一分科として始められた。[3] 1895年，デンマークのヴァーミング (E. Warming) による植物生態学，1914年，モロゾフ (G. F. Morzov) による森林学など，そのねらいは，森林や草原など，植物の共同体における植物相互間および植物と環境要因との間の関係を探究することであった。動物については，1927年，イギリスのエルトン (C. Elton) によって始められた。

人間については，1925年，アメリカの社会学者パーク (R. E. Park) とバージェス (E. W. Burgess) 等によって始められた。しかし，人間生態学は，パーク等がその研究対象を主として都市コミュニティーにおいたところから，一般には都市社会学の一派として認識されるにとどまっていた。事実，初期の人間生態学者のもたらした成果は，都市社会現象の研究がほとんどであった。彼らは，急激に都市化する社会状況を，シカゴを中心とした都市コミュニティーに焦点をあわせて観察・研究したのである。[4]

人間生態学の原語は“Human Ecology”（ヒューマン・エコロジー）であるが，医学とくに公衆衛生学の人々によれば，「人間生態学」ではなく「人類生態学」とも訳されている。[5]

山岸宏によれば，生態学の研究対象は，次の4つのレベルにまたがっている。1）生物の個体，2）同種の生物の集団である個体群，3）個体群を取り巻くすべての生物の集合体である生物群集，4）さらに生物群集と無機的環境を包括した生態系，である。[6]

公害問題が登場して以来，〝エコロジカル〟ということばは，一つの〝流行〟とも言えるほど，多くの分野で，種々さまざまな意味をもって使われてきた。〝エコロジカル〟という表現には〝生態学的〟という意味のみならず，〝環境論的〟，〝人類学的〟，〝地理学的〟という意味も含まれて使われることがある。〝生態学的〟ということばの使い方が多様であることは，生態学的分析枠組といったものが，明確な一定のものとしては未成立であることと関連している。

猪股修二は，「最近，各方面で『社会生態学』の重要性が叫ばれているが，かならずしも確定した理論的枠組は存在しないようである」と述べている。[7] 現在の段階では，分野のちがいをこえて，共通した意味・概念・理論的枠組を提示しうるほど，エコロジカル・アプローチが確立されているわけではない。沼田真は，次のように述べている。

> ヒューマン・エコロジー……人間生態学・人類生態学などという。生態学を対象によって分けて，動物，植物，微生物，人間，というようにすれば，その一分野にあたる。しかし，もともと自然科学の一分野として発達した生態学の枠からはみ出し，人間をあつかう以上，社会科学的な側面も大きい。…（中略）…本当の意味でのヒューマン・エコロジーは，自然科学と社会科学を総合した形で形成されなければなるまい。そのような，本格的なヒューマン・エコロジーは，いまだ建設されるに至っていない。[8]

エコロジーは，そのまま〝生態学〟と訳され，両者が同義的に使われることもあれば，一方，人によっては，この両者を区別して別々な意味を付与している場合もある。すなわち，〝生態学〟は生物の集団のみを扱い，〝エコロジー〟は，生物集団のみならず，人間社会をも含めた総合科学として認識する場合である。[9] 沼田のいう〝本格的なヒューマン・エコロジー〟を，ここでは〝ソシオ・ヒューマン・エコロジー〟と呼ぶことにしたい。[10] ソシオ・ヒューマン・エコロジーは，前述の〝生態学の研究対象の4つのレベルのうちの「生物群集と無機的環境を包括した生態系」の研究をその主たる対象としている。したがって「生態系」（エコシステム）には，人間社会も当然含まれている。

つぎに，ソシオ・ヒューマン・エコロジーへの関心が，昭和 40 年代後半以降の日本の社会的背景，人々の価値観の変化とどのように関連しているかをみていこう。

2．2　エコロジカル・パースペクティヴへの関心

ここでは，エコロジカル・パースペクティヴが注目を集めるようになった社会的背景について整理しておく。前述のように，学問としてのエコロジーは，19世紀にすでに誕生していたにもかかわらず，20世紀後半，それも特に '70 年代に入ってから，急速に脚光を浴び始めたのは，それなりの社会的背景が存在したからである。ここでは，それを，便宜的に 2 つに分け，1 つを「外なる要因」，もう 1 つを，人間の「内なる要因」と呼ぶことにしよう。

まず第 1 の「外なる要因」とは，現代の高度産業社会が，とりわけその経済活動を通して，自然あるいは資源といった面での，さまざまな限界と新しい問題に直面している，といった状況のことである。これは，村上泰亮のいう〝外なる限界〟[11] とほぼ同じ内容にあたる〝地球的資源の逼迫〟としての側面である。すなわち，エネルギー問題，食糧問題，大気汚染・水資汚濁・騒音などを含む一連の環境破壊の問題，などであり，その底には〝人口問題〟が，共通して存在する。

昭和 40 年代後半になって，人々の間では自然環境の破壊，欠陥商品等に対する意識が高まってきた。それは，マスコミの報道による影響もあるであろう。世界的にも，1972年，スウェーデンのストックホルムにおける国連人間環境会議の開催や，同じ年に発表された，ローマクラブの報告書「成長の限界」[12] などが与えた社会的影響は，日本のみならず国際的にも無視しえぬほど大きかったのである。アメリカの宇宙船アポロが撮影した，宇宙から見た地球の姿は，人々をして「宇宙船地球号」という認識をもたらしめ，地球の有限性に目を向けさせたのである。同時に，地球の外から自分たちの住む地球をながめ直す，という「視点の大転換」を広く一般の人々にもたらし，意識の変化，価値観の変化へ大きな影響を及ぼしたといえる。

「外なる要因」は，〝技術開発とその結果〟を通して，人々の意識・認識枠組，価値観へ大きな影響を与え，以下に述べる「内なる要因」の形成に関連している。

第 2 の「内なる要因」とは，人間の内側における変化であり，もっとも広義には〝思想の変化〟として理解することもできる。あるいは，人類のもつ世界観（世界認識）の変化とも言えるのである。エコロジカルなアプローチを生み出すパースペクティヴには，それなりの世界観・歴史観・自然観そして人間観の複合体としての，一つの〝パラダイム〟が存在する。現代の環境危機，生態系の破壊といった状況が，われわれの内なる認識枠組，思考の枠組と関連していることは，多くの人々によって指摘されているところである。

わが国では，すでに 1971 年 5 月，通産省が，各界の専門家 8 名から成る「エコロジー研究会」を設け，「産業を中心とする人間活動とその環境との複雑な相互関係を総合的動態的に解析し，評価する学」を，「産業エコロジー」と規定し，地球環境の総合システム的アプローチを模索し始めていた。その底には，実践を支える思想としてエコロジカルなパースペクティヴが考えられていたのである。[13]

「内なる要因」は，さらに 2 つに分けられ，第 1 は，総合的アプローチへの関心であり，第 2 は，エコロジカル発想法とでも呼ぶべき認識論の成立である。

人間の社会的諸活動の多くの部分において，細分化と分業化および特殊化が進み，総合化，統一化，体系化への要請が生まれ，学問の世界においても，「全体の傾向として，専門化，特殊化がすすみ，その反面，統合化，一般化への志向がますます著しくなってきた。」[14] これまでの縦割り科学では対処できない多くの「新しい問題」[15] の登場は，科学の再編成と，それを支える一般理論への関心を増加させたのである。システム論的アプローチは，そうした背景のもとに生まれてきたものなのである。

エコロジカル・パースペクティヴへの関心の高まりは，こうした「科学の再統合，一般理論構築への関心の高まり」と関連している。なぜなら，エコロジカル・パースペクティヴにおいては，システム論的アプローチが包括され，自然科学・社会科学の総合科学としてのソシオ・ヒューマン・エコロジーの成立が可能であるからである。奥野良之助は次のように述べている。「近代生態学の主流をなす，群集理論・生態系理論は，最近もてはやされている一般システム理論と，現象的にも本質的にも，見事な一致を示しているのである。」[16]

「内なる要因」の第 2 は，エコロジカル発想法であり，新しい視点である。沢田允茂は，次のように述べている。

> 現代の生態学的危機の問題は近代ヨーロッパ文化の根底をさぐり，近代的な文化の伝統の源泉に立戻って，人間が現在から未来にかけて直面するであろう環境にふさわしいような新しい文化の在り方を探求することを求めている。[17]

新しい文化の在り方は，新しい視野と展望から生まれて

くる。そのためには，視点の転換（パラダイムシフト）が起こることが前提となる。沢田は，「風景」という独特のことばを起用することにより，新しい展望をさぐろうとしている。「風景」は，それを見る「ひと」なくしては成立しない。しかも，その「ひと」とは，〝私〟でない他の人（第3者）ではなく，この〝私〟なのである。思考の出発点，発想の出発点としての〝私〟は，しかしながら，実存主義者の陥りやすい〝閉じた系（closed system)〟としての〝私〟ではなく，環境との連がりの中に〝開かれた系 (open system)〟として理解されている。そのことが「風景」という表現に示され，より端的に次のように述べられているのである。

私が私の周囲の風景を見ており，そして私はこの風景のなかで生きている。[18]

しかも「私の見る風景」は，〝私〟にだけ開かれているのでなく，「『私の環境の風景』は『私』から出発して，ある特定の時代の特定の集団の人々に共通な『我々の環境の風景』にまで（イメージを通じて）拡大される。」[19]こうして，「私」から出発したパースペクティヴは，他者との共有が可能となり，科学的分析を支える〝間主観性〟を獲得するのである。

2．3　「風景」の科学へ向けて

エコロジカル・パースペクティヴの中で構成される理論的枠組は，沢田が「風景の科学」と呼んでいるものと共通点を有する。

人間のもっている環境の風景の構造とその相互関係と，それに基づく行動のコントロールの仕方についての，より意識的で効果的な知識の体系としての科学があるとすれば，それは正しく風景の科学である。それはフッサールが「生活世界の科学」と呼んだものにも等しいだろう。[20]

フッサールのいう「生活世界 (Lebenswelt)」とは，自然な日常的体験において生きられる世界のことである。彼によれば，

生活世界は，それ自体としては，最もよく知られたものであり，すべての人間の生活においてつねにすでに自明的なものであり，その型に関しても，経験によってすでにわれわれになじまれている。[21]

生活世界は，その世界の中に目ざめつつ生きているわれわれにとって，つねにそこにあり，あらかじめわれわれにとって存在し，理論的であれ理論以外であれ，すべての実践の「地盤」なのである。[22]

生活世界は，さしあたり各自の世界として与えられるが，その生活世界を生きる主観は，他から孤立して存在する，単なる個人的な一個の主観ではなく，他者との共同主観性によって基礎づけられているのである。[23] 共同主観性を得るひとつの方法は，「知覚の風景」の拡大である。

個々の人間はそれぞれに異なる身辺的環境の「知覚の風景」から，即ち私の「他人の」それとは異なった眺めから出発して，それを時間的，空間的に拡大していけばいくほど，その拡大された部分については私の眺めも他人の眺めも次第にその差異をなくしていって，私にも他人にも共通な我々の共通な風景を見るようになるのである。[24]

ここではこれ以上，フッサールの「生活世界」の概念や，彼の後期の現象学的認識論に立入らない。しかし，現代の生態系の破壊の問題は，「認識」の問題を含めた形で理解しようとしなければ，問題点は整理されないままに，解決への糸口すらも見出せないであろう。

沢田は，「環境破壊をはじめ，生態学的危機とよばれている現代の諸現象は，もし私たちのもっている風景の全体が構造化され，私たちにとって透明であったとしたら起るはずのない現象である」[25] と述べている。

不透明な風景の一部分を「ブラック・ボックス」という限定内におさめ，さらにその中を明らかにしようとする科学に，行動諸科学があげられる。その行動諸科学の中の，心理学，マーケティング，社会学について，各々の分野でのエコロジカル・アプローチの現状を以下に見ていくことにしよう。

3．行動諸科学における エコロジカル・アプローチ

エコロジーということばが，さまざまな分野で，それぞれ互いに異なる意味を付与されて使用されていることは，前にも述べた通りである。エコロジカル・アプローチということばも同様で，〝エコロジカル〟という表現の意味内容も，実際には，必ずしも同一ではない。例えば，社会学で〝エコロジカル〟という場合，〝地理的，空間的，地域的，環境的〟という意味であるが，心理学で，バーカー (R. G. Barker) 等が〝エコロジカル〟という場合は，教室や遊び場などの日常的な〝生活空間の場，行動空間〟といった意味が強調される。マクロな環境論的視点や，人口問題，エネルギー・情報の循環などは問題にしていない。

つぎに，個別分野におけるエロロジカル・アプローチを見てみよう。とくに，最近エコロジカル・アプローチが，注目を浴びてきている3つの分野に着目してみよう。

すなわち，心理学，マーケティング，社会学において，実際，エコロジカル・アプローチとはどんなものかを簡単に見てみよう。それらは，相互にどの程度共通し，どう異なるのであろうか。

1) 心理学における
エコロジカル・アプローチ

実験心理学が人間の行動の法則を探究しているとするなら，心理学的生態学は，実験心理学の明らかにした法則が成立する諸要因が，現実の生活過程のなかで，どのように分布し，どう行動と関連しているか，について研究するものである，といえる。[26]

心理学におけるエコロジカル・アプローチの始まりは，コフカ (K. Koffka) の「行動的環境」概念，およびレヴィン (K. Lewin) の「生活空間の場理論」に見ることができる。[27] その後，バーカーとライト (H. F. Wright) によって生態学的心理学は発展してきた。[28] バーカーは「行動的セッティング (Behavioral Setting)」という概念を用いて，主に児童の行動観察をもとに研究を進めてきた。彼は，1960 年に「生態学と動機づけ」と題する論文を書いており，[29]「レヴィンのエコロジー重視をひきついで，その方向を展開させ」[30] 精力的に生態学的心理学の研究をおしすすめている。[31]

ここでいう「生態学的心理学 (Ecological Psychology)」は，最近注目を集めている「環境心理学 (Environmental Psychology)」と，同じではない。前者は，一つの特別な観察方法と分析枠組に特徴を有しているが，後者は方法を一つに限定せず，さまざまな方法を選出し，物理的環境要因が，人間の情緒や行動に与える影響を研究する。[32] しかし，環境心理学は一般的に確定した方法や範囲があるわけでもなく，論者によりまちまちである。

生態学的心理学が，その特徴を，行動の〝自然的または非統制的観察法〟におき，[33] 主として児童をその対象としたのに対して，環境心理学は，建築・都市計画・デザインといった分野と密接に関連し，物理的刺激と人間の心理（感覚・知覚）との関係を研究するのである。[34]

しかしながら，両者に共通の限界は，社会的・文化的要因との関連において研究するところが少なく，マクロな視野に欠けていることである。生態学的心理学は，対象を児童に限定しがちであり，しかも，観察対象としての行動が，〝非統制的〟であるとはいえ限定された場面における特定のものであり，より広い社会的文脈における人間行動でないことが指摘されよう。一方の環境心理学においても，シーガル (M. H. Segal) 等の研究[35] は文化的要因を扱ってはいるものの，その数は少ない。比較文化的視点をもった研究は，むしろホール (E. T. Hall)[36] の研究などにおいて見られる。

2) マーケティングにおける
エコロジカル・アプローチ

マーケティングにおいて，エコロジカル・アプローチが論ぜられるようになったのは，比較的新しいことである。それまでのマネジリアル・マーケティングから，エコロジカル（または，ソシオ・エコロジカル）マーケティングへの拡大は，むしろ始まったばかりといえる。村田昭治は，視点の変化を「'60年代の成長に専念してきたところから生じた社会的病弊，いわばエコノミックなテーマからエコロジカルなテーマへの発展」[37] と見ている。

宇野政雄，吉井敏子，片山又一郎等は，マーケティングにおけるエコロジカル・アプローチを，「第3段階のマーケティング」として位置づけている。

宇野は，

> '70年代のマーケティングは，このようにエコロジカル・アプローチから，いかなるエンバイロンメント（環境）に対応し，またそれをうけて，どのような創造，実践が企業として展開せねばならないかをその最大課題とすべきで，その意味ではマーケティング研究は，あきらかに第3段階にはいったといってよい。

と述べ，さらに続けて，

> 第3段階のマーケティング研究はシステム思考を，たんに企業内部の問題としてとらえるだけでなく，社会システム，自然システのムなかにおけるマーケティングのあり方という観点から，企業も消費者も，いずれも生活者として環境との問題において，よりよく生きてゆくためには，いかなる配慮をせねばならないか，そこに思いをいたしてエコロジカルなシステムズ・アプローチが展開されてきた。[38]

と語っている。

吉井も同様のことを次のように語っている。

> 第3段階のマーケティングは，商品の直接の購買者の欲望の充足を考えるだけでは不十分であり，自然の破壊を含めて社会的関係を考慮した研究が求められているが，それをソシオエコロジカル・マーケティングと呼びたい。[39]

片山は，市民が自然環境破壊の〝元凶〟として企業活動をとらえ，それへの責任追求の動きを〝エンバイロメンタリズム〟と呼び，それに対応する新しいマーケティ

ングとしてエコロジカルマーケティングをとらえている点は，宇野と同様である。片山によれば，

マーケティングは売手，買手以外の第三者に与える影響についてまでも考慮しなければならないようになってきている。…(中略)…つまり，売手としての企業，買手としての消費者はそれぞれ独立して存在しているのではなく，地球という生態システムの構成要素として存在しているのであり，各々の動きは必ず生態システムをとおして他の構成要素に影響を及ぼすのである。しかも，生態システムをとおしての影響はきわめてシビアであり，生命にかかわるものである。…（中略）…この生態システムとそのバランスを考慮し，人類としての人間の生存へのかかわり合いにまで配慮を及ぼすマーケティングなのである。[40]

宇野も片山も共に，エコロジカル・マーケティングを説明するのに「配慮」ということばを用いているが，エコロジカル・アプローチは，まさに生産者―消費者の関係以外の，より広い全体に対する〝関係性〟への認識と〝かかわり合いへの配慮〟といった視点があるかどうかにかかっている。そして，その全体性・関係性の中には，当然〝自分〟も含まれるのである。その点は沢田が風景ということばで，風景の中にあるものどうしの連がりと，その風景と自分との関係性を適切に表現していることが思い起こされる。

嶋口充輝は，エコロジカル・アプローチがもつところの，認識主体の対象への関係性について，次のように述べている。

マーケター (marketer) にとって，今後一般的に応用されていくと思われる行動の価値判断は，マーケターの努力によって生み出される予想結果から起る新たな世界が，はたして自分がそこに住みたいと願うものであるかを自問することにあろう。その意味ではマーケター自身もともに社会の構成一員なのである。…（中略）…

マーケティングは未来行動パターンによって表わされるような価値を探り出す社会の学習システムとして，また，マーケターみずからが欲するような倫理的，美的な理想をたずねる香り高い生活価値への鼓舞システムとして，さらには，みずからの理性的な目標追求をエコロジカル・サンクションと対応させうる存続システムとして追求される必要があるだろう。[41]（傍点筆者）

認識主体としてのマーケター自身が，自分もそこに生活したいと欲するような世界を描くということは，同時に，自分は個人的には望まないような生活は，他の人によっても望まれないということを明確に意識化しておくということである。そのことの認識は重要なポイントであり，さらに言えば，これからは認識主体が対象に対して，その関係を明確にすることが不可避であることを表わしている。

前の章で，沢田の「風景の科学」に言及した際，「私が私の周囲の風景を見ており，そして私はこの風景のなかで生きている」といわれていたように，エコロジカルな発想をもつマーケターは，自らもその風景の中で生きていくものとして「生活」をながめ，自らが欲するような生活世界の設計がおこなえるように対応していくことが求められているのである。

自分の視座を，より明確に認識すること，そこからの認識世界の広がりと奥行きとを拡張していくことが，エコロジカルな視点をもつことの必要条件といえるのである。

3)　社会学における エコロジカル・アプローチ ――人間生態学を中心に――

従来の人間生態学は，その研究対象がコミュニティーであり，そこに展開される人間の結合関係を，適応の様式，生活の構造や機能など，その静態・動態を詳細に観察・記述・分析するものであった。人間生態学のもつ理論的枠組は，とくに都市コミュニティーの研究に盛んに用いられ，またその中で発達してきた。人間生態学が，都市社会学の別名ないし一派として考えられるほど，都市社会研究への適用が多かったのである。

ここではむしろ，都市研究以外での人間生態学の応用可能性を模索することにしよう。

1950 年，ホーリー (A. H. Hawley) とクイン (J. A. Quinn) により各々同名の著書 "Human Ecology" が出版され，人間生態学の研究は，再び活気づいたのである。より広い包括的な理論的枠組として人間生態学を発展させていこうという動きは，その後，ギブス (J. P. Gibbs) とマーチン (W. T. Martin)[42]，シュノアー(L. F. Schnore)[43]，ダンカン (O. D. Duncan)[44] 等によって推し進められてきた。

ダンカンは，ホーリーの人間生態学からはなれて，独自の理論的枠組の構築をはかったのである。ダンカンによれば，人間生態学の概念枠組は，つぎの 4 つの要素から成り立っている。すなわち，人口，環境，技術，そして組織である。[45]

具体的な人口集団は真空中に存在するのではなく，一つの環境の中に存在する。そしてそこから生命維持のために有効な資源を獲得するのである。そのために技術が必要であり，社会組織が必要とされるのである。すなわち，個人の集合としての人口は，一定の技術を媒介にして環境に適応しつつ，独自の社会組織を形成する。この4つの基本的要素によって構成されるシステムをエコシステムまたはエコロジカル・コンプレックス（複合体）と呼ぶ。図―1は，このエコシステムを表わしている。各要素を結ぶ線は，それらの間に「機能的相互依存性」があることを示している。ここに示された4つの要素は，そのいずれもが互いに，他の3つを独立変数として置いたとき，被説明変数として用いられるということが

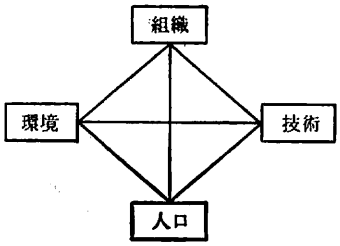

図 1　エコロジカルコンプレックス
（エコシステム）

特徴である。例えば，エコシステムというフレーム内では一つの組織形態は，他の3つの要素――環境，技術，人口――によって変化し，規定されてくることになる。あるいは，エコシステム内の人口を被説明変数におくならば，人口過程は，そのエコシステム内の他の3つの要素――環境，技術，組織――によって説明される，とするものである。

しかしながら，この点については，次のような批判を加えることができる。すなわち，ダンカンのいう4つの変数（人口，環境，技術，組織）が，どういう理論的根拠にもとづいて提出されてきたのか，また，個人の価値・態度・パーソナリティーといった要素については，エコシステム内では，どのように理解されるべきなのか不明確である。また，4変数のどれもが，被説明変数になりうる，ということは，逆に4変数による説明が，互いに順に言い換えたにすぎないトートロジーに陥る危険があり，全体的な連関の中で，さらにつっこんだ因果関係についての説明ができにくい，という難点が考えられる。[46)]

このように，ダンカンのエコシステム論も不十分なところがあり，今後その点を含めてさらに詳しい論究が必要とされよう。しかし，社会学の中では，今のところ，このダンカンのエコシステム論は，未完成ながら，本稿で扱ってきたソシオエコロジカル・パースペクティヴの中に位置づけられつつ，今後，発展しうる可能性を有している点は，注目に値するものである。エコシステム論が，現在，社会学において盛んに論ぜられている社会システム論と，どう関連づけられるかについては，いろいろ議論のあるところであり，いずれ機会があれば，その点についても触れたいと考えている。

ま　と　め

以上，本稿ではエコロジカル・パースペクティヴへの関心の高まりと，その社会的背景並びに認識論のレベルにおけるエコロジカル・パースペクティヴのもつ現代的意味について，それらが，有限なる地球環境に生存する人間の，類としての存在と，個としての存在との両方の観点から無視しえないものであることを述べた。そして，現代社会における行動諸科学，その中でも心理学，マーケティング，社会学の3分野におけるエコロジカル・アプローチの現況を見てきたのである。しかし，いずれの分野においても，エコロジカル・アプローチは，未完成であり，今後の展開に待つところが大きいのが実状であることがわかった。社会学においては，ダンカンのエコシステム論を出発点として展開する可能性があり，またマーケティングにおいては，第3段階のマーケティングへ寄せる実践的期待も大きく，その展開が期待されるところである。心理学においては，今後，建築心理学，環境心理学と生態学的心理学との隔たりが，どう展開していくかに，心理学におけるエコロジカル・アプローチの展開はかかっており，現在のところ，それがいかなるものか不明である。むしろ，社会心理学において今後，文化的，社会的要因をも統合した形の新しいエコロジカル・アプローチの展開が期待しうるのではなかろうか。

（注）

1) 中鉢正美『現代日本の生活体系』p. 2-3，ミネルヴァ書房，1975
2) エコロジーの語源は，ギリシャ語の oikos（家，住居地）に始まり，oikos の学門 (logos) という意味だった。economy の eco も，ecology の eco も共に oikos (house) に由来している。
3) Ecology という英語が，最初に出たのは 1873 年のことである。Lynn White, Jr., "The Historical Roots of Our Ecological Crisis," in J. H. Sins

and D. D. Bauman, *Human Behavior and the Environment*, p. 18, Maaroufa Press, 1974
4) R. E. Park, E. W. Burgess, and R. D. McKenzie, *The City*, Univ. of Chicago Press, 1925
5) 勝沼晴雄・鈴木継美（編）『人類生態学ノート』東大出版会，1970
6) 山岸　宏『現代の生態学』p. 4，講談社，1973
7) 猪股修二『情報エコロジーは展開する』日刊工業新聞社，1973
8) 沼田　真『自然保護と生態学』p. 214，共立出版，1973
9) NHK 現代の科学グループ『ヒトの住む星』p. ii，日本生産性本部，1971
10) 1976年8月ユーゴで開かれた国際社会学会のソシアル・エコロジー研究委員会に出席した岡田真は，次のように報告している。「ヒューマンエコロジーでなく，ソーシャルエコロジーであるべきことが強調された。…今後はとりわけ，社会環境を重視すべきであり，…ソーシャル・エコロジーを称さねばならないというのである。」日本社会学会ニュース No. 80，1976，9，p. 12
11) 村上泰亮『産業社会の病理』p. 7～13，中央公論社，1975
12) D. H. Meadows and D. L. Meadows, *The Limits to Growth*, 1972 大来佐武郎（監訳）『成長の限界』ダイヤモンド社，1972
13) 通産省エコロジー研究会『産業政策へのエコロジー的接近——産業エコロジーモデルの開発とその産業政策への適用』1972，4
14) 飽戸弘「行動科学の基礎——社会心理学へのインパクトを中心に——」p. 160，『科学基礎論研究』Vol. 9，No. 4，1970，3
15) 富永健一『産業社会の動態』pp. 264-268，中央公論社，1970，宍戸・富永・村上・山田『先進国問題の展望』pp. 143-150，日本経済新聞社 1970
16) 奥野良之助「生態学からみた社会」『公害研究』Vol. 2，No. 2，pp. 10-16，1971，7
17) 沢田允茂『認識の風景』p. 19，岩波書店，1975
18) 沢田，前掲書，p. 31
19) 沢田，前掲書，p. 90
20) 沢田，前掲書，p. 267
21) フッサール「ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学」，『世界の名著ブレンターノ，フッサール』p. 491，中央公論社，1970
22) 前掲書，p. 512
23) 木田元『現象学』p. 68，岩波書店，1970
24) 沢田，上掲書．p. 88
25) 沢田，上掲書．p. 279
26) 『心理学事典』pp. 534-535，平凡社，1968
27) H. M. Proshansky et al., "The Influence of the Physical Environment on Behavior: Some Basic Assumptions", p. 28, in H. M. Proshansky et al. ed., *The Environmental Psychology*, Holt, Rinehart and Winston, 1970
28) R. G. Barker and H. F. Wright, *Midwest and Its hildren*, Harper and Row, 1955
29) R. G. Barker, "Ecology and Motivation" in M. R. Jones (ed.) *Nebraska Symposium on motivation*, pp. 1-49, Univ. of Nebraska Press, 1960
30) 八木冕監修，佐治守夫編『講座心理学 10 人格』東大出版会，p. 183，1970
31) 代表的なものとして，
R. G. Barker and P. V. Gump, *Big School, Small School*, Stanford Univ. Press, 1964
R. G. Barker, *Ecological Psychology*, Stanford Univ. Press, 1968
32) A. Mahrabin and J. A. Russell, *An Approach to Environmental Psychology*, pp. 4-5 The MIT Press, 1974
33) 北村晴朗，黒田正典他編『心理学研究法』p. 438，誠信書房．1969
34) D. Canter，乾正雄編『環境心理とは何か』彰国社，1972
大山正・乾正雄編『建築のための心理学』彰国社，1969
穐山貞登『デザインと心理学』鹿島出版会，1973
入谷敏男『環境心理学への道』日本放送出版協会，1974
35) M. H. Segall, D. T. Campbell and M. J. Herskovits, "Some Psychological Theory and Predictions of Cultural Differences," pp. 153-167 in H. M. Proshansky et. al. Ibid., 1970
36) E. T. Hall, *The Hidden Dimension*, 1970
日高敏隆・佐藤信行（訳）『かくれた次元』みすず書房，1970
37) F. F. マウザー，村田昭治「(対談) マーケティングとエコロジーの接点を求めて」『マーケティングと広告』Vol. 16，No. 1，p. 11，電通，1971，1
38) 宇野政雄「第3段階のマーケティング——エコロジカル・アプローチとコンシューマリズム——」，『マーケティグと広告』Vol. 16，No. 1，p. 8，電通，1971，1
39) 吉井敏子「ソシオエコロシカル・マーケティングへの接近」，『マーケティングと広告』Vol. 18，No. 7，p. 23，電通，1973，7
40) 宇野政雄監修，片山又一郎『生態的マーケティグ』p. 137，ビジネス社，1975，エコシステム（生態系）とは，生態学の語法にならえば、「群集と無生物環境」から成り，その構成要素は，①非生物的物質，②生産者，③大型消費者，④分解者または微小消費者である，といわれている。（オダム，水野寿彦（訳）『生態学』pp. 6-12，筑地書館，1967）
片山は，マーケティングにおいて，①をおとし，生産者，消費者，分解還元者の3つに分けている。（片山，前掲書，p. 139-140）
41) 嶋口充輝「マーケティングにおけるエコロジカル・アプローチについて」，『マーケティグと広告』Vol. 16，No. 1，p. 22，電通，1971，1

42) J. P. Gibbs and W. T. Martin, "Toward A Theoretical System of Human Ecology," *Pacific Sociological Review*, Vol. 2, No. 1, pp. 29-36, Spring, 1959
43) L. F. Schnore, "Social Morphology and Human Ecology," *American Journal of Sociology*, Vol. 68, pp. 620-634, May, 1958
———, "The Myth of Haman Ecology," *Sociological Inquiry*, Vol. 31, No. 2, pp. 128-139, 1961
44) O. D. Duncan, "Human Ecology and Population Studies," in P. M. Hauser & O. D. Duncan (ed.) *The Study of Population*, pp. 678-716, The Univ. of Chicago Press, 1959
———, "From Social System to Ecosystem," *Sociological Inquiry*, Vol. 31, No. 2, pp. 140-149, 1961
45) O. D. Duncan, Ibid., 1959, pp. 681-684
46) 野原誠, "人間生態学とエコシステム", 『人口問題研究所年報』p. 73, 1972